

王と月2

グレゴル

王の側近の一人。
真理のことを
疎ましく思っている。

ウェンデル

後宮で暮らす貴族令嬢。
王に気に入られている
真理を目の敵にしている。

イルミリア

真理に仕える貴族女性。
頼れるお姉さんの存在で、
真理に慕われている。

イマール

王の一番の側近である、
物腰柔らかな紳士。
王に振り回されて
いつも苦労している。

ユーリス

王の、年下の叔父。
天真爛漫な美形で、
真理がお気に入り。

アルフレッド

アルフレディア国の若き国王。
威圧感あふれる赤い瞳を持ち、
圧倒的な美貌を誇る。
真理を「小動物」と呼び、
時に激しい執着心を見せる。

青井真理

裏山に星を見に行く途中、
異世界にトリップしてしまう。
後宮に入れられ、何かと王に
構われるうちに、彼を理解しよう
という気持ちが芽生えてきた。

登場人物
紹介

目次

王と月 2

番外編 交換条件

237

7

王と月2

プロローグ

私の名前は青井真理^{あおいまり}。十九歳の日本人だ。

生まれも育ちも日本である私は、ある日突然、異世界へトリップした。

裏山に星と月を見に行く道の途中、気が付けば、ここアルフレディアという国にいたのだ。

この国を総べるのは、美麗なるアルフレッド王、二十三歳。思わず見惚れるほどの美貌に、印象的な赤い瞳を持つ。まさに王者の威圧感を醸し出している人物だ。

そんな王の胸元に落下したのだから笑えない。しかも、ここでは大事な式典の最中だったらしいいきなり出現した理由を尋問されたが、そんなのこちらが聞きたい。

やがて、私は自分が異世界トリップしたことを知った。なぜなら、私が、『時折現れる異世界人』と告げられたからだ。

そしてなぜか、後宮に入れられてしまった。しかも、私が小柄なせいかわから、『小動物』と呼ばれるようになる。

人の呼び名をそんなものにするなんて、あんまりじゃないか!? コンプレックスを刺激されてムツときた私は思わず、王を睨んでしまった。

そこから私の生活は一変したのだった。

まず、夜になったら、王が私の部屋にやって来るようになった。だけど、後宮の女としての務めは強要されない。王がベッドで、私がソファで眠る日々が続いた。

そして、王は私を事あるごとに構ってくるようになった。

私を構っている時の王は、美麗な顔に意地の悪そうな笑みを浮かべ、実に楽しそうだった。それが悔しくて、憎まれ口を叩く私に、面白かった王がちよっかいを出してくるといふ繰り返しだ。

そんなある日のこと、時間を持って余っていた私は、いろいろあつて王宮の下働きをすることに なった。野菜洗いに掃除や洗濯——忙しい毎日だったけれど、とても充実していた。でも、王の部屋のシート交換係に任命されるなど、下働きの期間も王に構われることになってしまった。

すごく意地悪だと思っているのに、たまに優しい言葉をかけられる。

いったい、本当の王の姿はどつちなの？ 私のことをどう思っているのだろうか？

そんな気持ちが始めた頃、三カ月で下働きを強制終了させられた。

そして後宮に戻った夜、私は初めて王に抱かれた——

相変わらず意地悪なことを口にするけど、王は優しくかった。本当に、この人は何を考えているの だろうと、不思議に思うのは変わらない。

私の中で芽生えた感情——それは王のことをもっと知りたいというものだった。

「イルミさん、庭を少し歩きませんか？」

私は部屋の窓辺に立ち、外を眺めて言った。

私が声をかけると、イルミさんにはっこり笑って優しい笑みを見せてくれる。

「そうですね。いいお天気ですし、庭園のイメリアの花も満開でしょう」

イルミさんは私が下働き時代よく世話を焼いてくれた、とても頼りになるお姉さんだ。

本名はイルミリアさんなのだが、私は下働き時代の愛称のまま『イルミさん』と呼んでいた。

王の指図のもと、私の見張りを兼ねての指導係を務めていたらしい。だけど、私が後宮に戻されてからは侍女として、こうやって側にいてくれることになった。

面倒見がいいイルミさんがこれからも私の側についてくれて、本当に嬉しい。敵だらけだと思っていた後宮で初めて見つけた、心を許せる存在なのだ。

イルミさんの同意のもと、私は庭園に下りた。風を感じつつ、ゆっくりと庭を歩く。

「アオイ様、お飲み物を取ってきますわ」

「イルミさん、ありがとう」

私は、庭園を駆けて行くイルミさんの後ろ姿を見送った後、側にあつた椅子に腰かけて大きく伸

びをした。

のどかな昼下がり、緑の多い庭園は整備されていて、多種多様な花が咲いている。

空を見上げると、鳥が舞い、美しい歌声を披露していた。

鳥はどこへでも自由に飛んで行けるのだろう。後宮というカゴの中にいる私と違い、羨ましいことだと思いつながら、太陽の眩しさに目を細めた。

私は庭園や図書室など、城の特定の場所には出入り出来るが、後宮から外に出ることは出来ない。かといって毎日部屋に籠もってばかりいては、運動不足で体がなまってしまう。だから、せめて庭園だけは毎日歩こうと決めていた。

イルミさんが戻ってきて、飲み物で喉を潤したら、また歩こう。

そう思って前を見た私は、誰かが近づいてきていることに気付いた。

それが誰なのか分かった瞬間、また面倒なことになるような予感がして、ため息をつきたくなった。

やってきたのは、ウエンデルという後宮の女性だ。彼女は妖艶な美女で、いつも露出の多い服装をしている。ついでに乳もでかい。

とはいえ、見かけは美しくても、内面もそうだとは限らない。

彼女は私を憎んでいる。それは、私が王に構われるから。彼女は王の寵愛を得ようと必死なのだ。

それに、彼女の家は有力な貴族であるサマンサ家。身分もなければ、抜きんで美しくもなく、秀でた能力もない私が目障りなのだろう。

「……! あなた……!!」

向こうも私に気付いたようだ。ウエンデルは目を見開き、表情を鬼の形相へと変える。どうやら私に一言文句を言わないと気が済まないのだろう。私も気を引き締めて、身構えた。

「凶々しく、後宮へ戻ってきたのね」

過去にウエンデルには、頬を叩かれたり足を踏まれたりと、散々な目に遭っている。またいつ、彼女から意地悪をされるかと思うと気が抜けない。これは、ごく自然な反応だと思っ。

背の高いウエンデルは小柄な私を見下ろし、心底嫌なものを見る目つきを向ける。

そんなに嫌なら無視すればいいのに、それも出来ないらしい。

「ちよつと来なさいよ」

私の返事など聞かずに、腕を掴みぐいぐいと引つ張るウエンデル。彼女は我を忘れ、すでに淑女の仮面を脱ぎ捨てている。やがて庭園でもあまり人気のない場所へ連れてこられた。こんな時、小柄な自分が憎い。逆らいたくても力じゃ敵わないのだ。

私を壁際まで追い詰めると、彼女は壁を激しくドンと叩き、私の頭の両側に手を置いた。

「一度は王の不興を買い、下働きにまで身を落としたくせに、ここに戻って来るなんて……。あなたなんて、あのままいなくなればよかったのに。どこかで野垂れ死んでしまえばよかったよ……!!」

女性からの初めての壁ドンは、残念ながら気分がいいものではなかった。身の危険を感じつつも、早口でまくしたてるウエンデルの言葉を聞き流す。だって、まともに聞いても、楽しい言葉ではな

いのだ。こういう時は、聞いている振りして、神妙な顔をしているに限る。

それにしても、どうしてここまでの敵意をぶつけられなきゃいけないのだろう。

しかし、以前よりもいっそう激しいと感じるのは、決して気のせいではない。

憎々しげに私を見下ろす妖艶美女——ウエンデルに一瞬体が強張るも、私は悪いことをしていない。だから堂々としていいはずだ。いつか隙を見てやり返してやりたいが、今は大人しくして思うと思う。面倒事は出来るだけ避けたい。

「ちよつと、呆けた顔して、人の話を聞いているの!？」

「……はい」

本当はまともに聞いちゃいないよ。

まあ、言いたいだけ文句を言えば、彼女だって満足して私を解放するだろう。

そう思っ、じつと耐えていたその時——

「よお! 久しぶりだな」

殺伐としたこの空間に、やけに明るい声が響き渡る。ウエンデルが声のする方を向いた。

空気が和らいだのを肌で感じてホツとした私も、同じ方向に顔を向ける。

「……あつ!」

思わぬ人物の登場に、私はつい声を出してしまった。

私の視線の先にいたのは、面白そうに瞳を輝かせて笑うユーリスだった。

ユーリスは王の叔父だが、王より年下の十八歳。

好奇心旺盛な彼は、いつも暇だと言いながら何か楽しいことを探しているらしい。

私が最初に彼に会ったのは、私が下働きだった時だ。王の部屋のシーツ交換をしていた私は、そこでユーリスと偶然出会ったのだ。

その時、ユーリスに名前を聞かれた私は、咄嗟に偽名を使った。その名はウエンデル。もっとも、その偽名で勘違いをされたせいで、ユーリスの屋敷へと連れ去られ、自分自身の首を絞める結果になったのだけど。もう二度と偽名は使わないと、心に誓ったことは記憶に新しい。

そんな彼が、なぜここにいるのだろう。いや、王族だから、この城にいてもおかしくはないのだが。

なんだか嫌な予感がする。私の悪い予感はいたい当たるから、よりいつそう不安だ。

「元気だったか？ ウエンデル？」

そう言っただけでユーリスは、笑顔で私達の方に向かって歩いてくる。彼の言葉を聞いたウエンデルは、すぐに妖艶な笑みとしなを作った。そこには、先程まで私に凄んでいた顔はない。即座に淑女の仮面を装着したのだ。

彼女はとても美しい微笑みを浮かべ、ユーリスに笑いかける。

「私みたいな者の名前まで覚えて下さっているとは、身に余る光栄ですわ、ユーリス様」

喜びを滲ませて挨拶するウエンデルの変わり身の早さに、ある意味感心してしまう。

しかし、ユーリスはウエンデルを横目で見て、訝しげな顔をする。

「……ん？ 誰だ、お前？」

その発言で、周囲が一瞬で凍った。

「……今、私を呼んで下さいましたよね、ユーリス様」

「お前もウエンデルというのか？ ……ふーん」

かろうじて微笑みを顔に貼り付けるウエンデルだったが、頬がわずかに引き攣っている。

やばい、やばい、やばい——私の心臓がドクドクと波打つ。

ユーリスはウエンデルを軽く無視して、私に向き合った。

「おいウエンデル、返事しろよ」

「……」

ユーリスが私に向かってその名を呼ぶので、冷や汗をかいた。お願いだから、今はその名前を呼ばないで！ 王が私を迎えに来た時に、その名は偽名だって知ったはずじゃない！ もう忘れたの!?

そう叫びたいけど叫べない。黙って耐えるのみだ。

隣に立つウエンデルの視線が痛いほど、私に突き刺さる。

私が固まっている様子を見たユーリスは、顎に手を当てた。

「……ああ、そうか！」

ユーリスは、閃いたとばかりに手を叩く。

「ウエンデルという名は嘘だったんだよね。面倒事はそいつに押し付けようと思って、その名を騙ったんだろ？ ……で、本当の名前は何というんだ？ 小動物か？」

ユーリス……。すぐそこにいるのが本物だから！ 声に出して確認しないで！ そう叫びたいけど、出来ない！

するとユーリスは、からかうように私の顔をのぞき込む。

瞳を好奇心で輝かせ、私の反応を見ているのだ。

空気を読まない言動に、白目むいて倒れそう。……いや、倒れたい。

まさにこれが、身から出た錆さびというものなのだろうか。

私の肩に手を置き、白い歯を見せて笑うユーリスの口を、ますます縫きざってやりたくなくなった。

「……きゅ、急な用事を思い出しましたので、これで失礼しますわ、ユーリス様」

ウエンデルは微笑みを顔に貼り付けたまま、ユーリスに向かって挨拶あいさつをした。

彼女の青筋を浮かせた笑顔と厳しい眼差しが、怒っていることを如実にじじつに伝えてくる。

彼女は横を通り過ぎる際、私だけに聞こえるほど小さな声で囁ささやいた。

「私の顔によくも泥を……。覚えてらっしゃい」

それと同時に殺意の籠かごもる瞳を向けられて、さすがに硬直した。

去りゆくウエンデルの背中から、憤怒ふんぬのオーラが出ている錯覚さえする。

これから先、自分とウエンデルの関係がどうなるか、簡単に想像がつく。悪化の一途をたどる、

とどめの一撃をユーリスは決めてくれた。

痛恨のダメージをくらって、暗くなる私の表情を見たユーリスは、

「何だか面白いことになりそうだな」

と、口笛を吹いて笑った。

どこがだ、どこが!!

そもそも、なぜこの場で火に油を注そそぐような発言をしたの？

ただでさえウエンデルには疎そまれてるのに、これ以上悪くするのは勘弁せまして欲しい。

最初は、軽い仕返しのため『ウエンデル』と名乗ったのに、まさか本人に知られてしまうとは――

「俺に嘘の名を教えただろう？ これは、その礼だ」

こんな礼はいらない！

ユーリスを睨にらむが、彼は全く悪びれた様子もない。

そりゃ、こうなったのも私が偽名を使ったせいだけだ。ここ一番という時にそれを返してくるなんて、悪意があるとは思えない。

「そう睨にらむなよ。俺だって、しばらく城への出禁できんを食らったんだぞ。勝手な行動をするとか、うるさく言われてな。暇で大変だった」

そうですか。

もう少しご自分の屋敷に籠もっていれば良かったのでは、と思う私は意地悪なんでしょうか。

「今までは多少のこともしても、アルは何も言わなかったのに、たかが下働きの一人を連れて行っただけで、これだもんなあ。参ったぜ」

口では参ったと言っておきながら、全然懲こりてない気がするのは、私の思い過ごしでしょうか。

「だけど、お前といると退屈しなさそうだな、マリ」
その瞬間、瞳を見開いた。

この……！ 私の名前、知っているんじゃないか！

先程は、わざとウエンデルの鼻先を折ったのだ。怒りの矛先が私に向かうように。どこかあどけなさが残る顔に笑みを浮かべるユーリスを見て、確信する。

この根性の悪さは、紛れもなく王と同じ血が流れている証拠だろう。

王族はみんな癖のある性格をしていると、私の心に刻んでやる。

「そんな怖い顔するな。久々に会ったんだし。あー、それより喉が渴いたな」

私の怒りを気にもせず、自由奔放に振る舞うユーリス。そうだった、彼はそんな性格だったわ。

私はこれ以上怒っても無駄だと思い、早々に文句を言うのを諦めた。

そうこうしているうちに、紅茶のセットをワゴンに載せたイルミさんが戻ってきた。

「お、ちょうどいい。俺も一杯もらおうか」

先程のウエンデルとのやりとりで本当は疲労困憊なだけで、ユーリスに付き合えと言われたら、付き合うしかあるまい。王族の頼みを断るなんて権限、そもそも私は持っていないのだから。

私はため息を堪えつつも、イルミさんにお茶を用意してもらった。

イルミさんが紅茶を淹れると、周囲に爽やかで癒される茶葉の香りが漂った。私とユーリスは庭園に設置されているテーブルセットに向かい合わせて座る。この庭園はお茶会を楽しめるように造られているので、椅子もテーブルも元々置かれているのだ。

紅茶を一口飲んだあと、ユーリスが口を開いた。

「でも、お前がアルのお気に入りだったとはな。正直驚いた」

お気に入り……なのだろうか、私って。あんなひどい扱いをされているのに。

「アルのお気に入りかどこにいるかと探していたが、まさか下働きとして働いているなんて夢にも思わなかった」

「それは私が望んだからです」

「いくら望まれたとはいえ、普通、お気に入りの女にそんなことさせる奴はいないだろ。だから、それを許したアルにも驚いたけどな」

そう言ってユーリスは笑う。快活な笑い声が周囲に響いた。

「何だかんだ言って、自分が認めた奴には寛大だからな、アルは」

確かに先日の夜は優しかった。そんな気がする。

先日の夜とは、私が三カ月間、下働きの仕事を終えた最後の日のことだ。

王は、私の啖呵を聞き入れて、三カ月だけ下働きとして過ごすことを許したのだという。そして、今度は私が対価を払う番だと言い、王は私を抱いたのだ。

『優しくしてやる』

王が宣言した通り、確かに優しくかったと思う。乱暴なこともされなかった。そっと私に優しく触れる、王の手。頬を撫で、髪を梳く丁寧な手つき。

初めて王を受け入れた時は、痛くて涙が出そうだったことは記憶に新しい。

そして全てが終わった後、王は何も言わずに私の顔を静かに見ていた。私もベッドに横になったまま、月明かりに照らされた王の顔を見つめた。

それは不思議な時間で、お互い余計な言葉は発せず、ただ静かな時を共有した。

私と王、そして私達を照らす月と――

その時のことを思い出し、顔が赤くなってしまういそうな気がして、私は慌てて首を振った。

「そんなことは……ないと思います」

王が私を認めている？ 寛大？ なぜ、そう解釈するのだろうか。

「でも特別な待遇を受けているんだろ？ 好きにさせているみたいだが、片時も目を離さないじゃないか」

ユーリスは、私の側にいたイルミさんにチラリと目をやる。

「……よく、わかりません」

これが私の正直な感想。

だって、よくわからない。王の本当の性格も、考えも、気持ちも――

これから徐々にわかるようになるのだろうか。いや、わかるようになりたいと、あの夜からそう思っている。まだ行動に移してはいないが、これからやらなくてはいけない。

人から聞くより、自分自身で見た王の姿を知りたいのだ。

そう思い直す私を見て、目を瞬かせたユーリスが口を開く。

「お前、珍しいな。アルは王だ。もっと王のお気に入りであることを使って、さっきの女――ウエ

ンデルとやらに、圧力をかけてもいいんだぞ。なぜ、言われればなしなんだ？」

「それは……」

一言で言うと、面倒だからです。

それに、仮に自分が王のお気に入りだとして、それを鼻にかけて威張っていても、それがなくなったらどうするのだ。嫉妬にかられた女性達から、ここぞとばかりに総攻撃を食らうだろう。

そうになったら、助けて欲しいと王にすがる？ 媚を売る？ そのどちらも、私には出来そうにない。

そもそも、王は私に興味がなくなった時点で、鼻でフンツて笑ってすぐにお払い箱にしそうだな。困ったことがあっても、優しく『大丈夫か』なんて手を差し伸べる図が想像出来ないのはなぜだろう。

きつと優しい一面もあると思うのだけど、真っ先に意地悪な部分を思い出してしまふ。

でも、本当の王は……どうなんだろう。

飽きっぽいのかどうかすら、わからない。これから身をもって経験するのだろうか、私を構うことに飽きるのはいつなのだろうか。三カ月後か、半年後か、一年後か――それとも一生？

まさかね……

私は心の中で即座に否定した。

人の心はうつろいやすいもの。日本でも、愛を誓いあった夫婦が離婚するのだって珍しくないのだ。むしろ一生添い遂げる方が、難しいように思える。――私の両親がそうだったように。

「嫌がらせをする相手を、直接脅してみればいいじゃないか」

物思いにふけっていた私はユーリスの明るい声を聞いて、我に返る。

「一番はアルに泣きついてみることでいいかな。効果抜群だと思うぞ」

「——それは嫌です」

「なんでだ？」

「寵愛を盾に脅すなんて出来ませんし、王に頼ったところで、『面倒だ。自分でなんとかしろ』と切り捨てられそうですし……」

間違ってもウエンデルに『わたくし、先日王の寵愛を受けましたのよ』なんて、得意げに言うことなんて出来ない。地獄を見るだけだろう。それに、王に頼るのだからって難しい。

するとユーリスは目を数回瞬かされたのち、噴き出した。

「あははは！ それはないと思うけどな。アルも王である前に男だ。頼られて嬉しいと思うことはあっても、面倒だなんて思わないさ」

「でも……」

「マリは男心をわかってないな。むしろ頼られて、必要以上に張り切るかもしれないぞ？ 試しに一度ぐらい言ってみようよ」

「けど……」

なぜこうもユーリスは、はつきりと言い切れるのだろうか。逆に疑問に思うわ！

だから私は、心の内を素直に口にする。

「やっぱり出来ません。だって王のお気に入りであるうちはいいですけど、そこから外れた瞬間、他の女性達にここぞとばかりに仕返しされますよ？ そうなったら、きつと王は、虐められている私を高い塔の上から笑って眺める気がします。しかも、酒を片手に、周りには美女をはばらせて」

ユーリスは一瞬口を開けて呆気にとられた後、豪快に笑った。

「なんだよ、それ！ お前の想像力は素晴らしいな」

「いえ、本当にそうなりそうですし……」

「それじゃアルは、すごく嫌な奴みたいじゃないか」

ユーリスは再び声を出して笑う。ついには目の端に涙まで滲ませた。

しばらく笑ったあと、指先で涙を拭いながら口を開く。

「俺は俺で、お前を心配しているんだけどな。そんな頑なな態度ばかり取っていると、不器用だっって言われるだろう？」

それは子供の頃から散々言われていたことだ。出会って間もないユーリスに見抜かれるほど、私の性格はわかりやすいのかと、自分に呆れてしまった。だが、それも私だ。

そして、ユーリスの笑い声が響き渡るこの庭園で聞こえて来たのは、静かな足音。振り返ると、そこには黒髪を風になびかせた男性が立っていた。

端正な顔立ちをした彼は、目を鋭く細め、無表情のまま私に近づいてくる。

「楽しそうな相談をしているな」

「——王」

いつの間に来ていたのだろう。そして、どこから話を聞いていた？

真っ直ぐに私を射抜くのは、赤い瞳。思わず見惚れてしまいそうになるほど、圧倒的な美貌を持つ。全身から放たれる威圧感、王者の証あかしなのか。

王は、鼻で笑って口を開いた。

「お前の想像力が逞たくましいのは結構なことだが、俺はそこまで極悪非道ではない」

赤い瞳を細めたまま、口元に微笑を浮かべる。

私の想像があまりにもバカれていると呆れているのだろうか、と思った瞬間——

「女達に虐められると言つても、せいぜい裸で外の木に張り付けにされた後、罪人達の慰なぐさみものになるぐらいだろう。命までは取られまい」

「……………」

サラツと言う王を見る私の表情が、徐々に険げしいものになる。

やっぱりこの人の寵愛ちゆうあいなんて、信じちゃいけない。まやかした。一瞬でも優しいと思つたのは、

あの夜の月が見せた幻覚に違いない。

「なんだ、それでは嫌か？」

眉間に皺しわを寄せて睨にらむ私を、王が楽しそうに見る。

嫌に決まっているだろう。だいたい、そんなことをされて喜ぶ人間がどこにいる。私はそんなド変態ではないし、いくら嫉妬に駆られても、そんなことをするほど人間落ちたくない。それを笑っ

て見ていられる人とは、一生お付き合いをしたくないと思う。

嫌悪で顔が歪む私を見た後、王は向かいに座るユリスに視線を投げる。

「ユリス。広間で、イマールがお前のことを探していた」

「イマールが？」

「ああ」

イマールさんは王の腹心であり、第一の側近だ。眼鏡がトレードマークの彼は物腰が柔らかく、王とは対照的に穏やかな性格をしている。

彼の名を聞いて片眉を上げたユリスは、少し悩んだ後、椅子から立ち上がる。

「じゃあ、ちょっとイマールに会ってくるか。また来るからな、マリ」

ユリスは、ここに来た時と同じく慌ただしく、この場を去った。

王は、同じくイルミさんにも視線を投げる。

すると彼女は一礼し、静かにこの場を去って行く。えっ、今で王の言いたいことが全部わかったの？

視線一つで全てを察する有能なイルミさんの背中を呆然と見つめていると、再び王に声をかけられる。

「話の続きだが——」

まだ言うか!? こんな悪趣味な話を、なぜ真っ昼間から続けなくてはいけないのだ。

顔をしかめて王の顔を見つめる私とは反対に、王はすごく楽しそうな笑みを浮かべる。

「では、女達に虐められて罪人達の慰みものになる前に、臣下に下げ渡してやろうか？」
「……………」

臣下に下げ渡す？ わざわざ下げ渡し先を探さなくても、当面の生活費をいただけたら後宮を出るので、女性達のイジメにも遭わずに済む。それでいいじゃないか。それも叶わないのなら、いつそのこと修道院にでも送り込んで欲しい。

「だけど王は、こっちの返事を待つこともなく、勝手に話を進める。」

「そうだな……バルバロド伯爵はどうだ？」

バルバロド伯爵とは確か、脂ギツシユでぶよぶよした体つきをしている中年貴族だ。ねっとりともまわりつく、蛇のような目をしている。しかも加虐精神の持ち主で、夜の行為に及ぶ際は、相手の肉体を傷つけることで性的興奮が得られるタイプらしい。

以前、後宮の女性達が、そんな男の相手はいくら頼まれても絶対無理だと噂していた。私だってそんな相手はごめん。そもそも私なんて押しかられた瞬間、圧死するだろう。

首を激しく横に振って拒否を示す。

すると王が、一步一步と近づいてきた。

「では、その男の側と俺の側、どちらがいい？」

熱が籠もる王の瞳から目をそらすことが出来ず、私は椅子に座ったままじっと見つめ返す。

王は私の前にあるテーブルに手を付くと、顔を徐々に近づけてきた。

ムスクとアンバーの混ぜ合わさった香りが鼻腔をくすぐり、距離の近さを実感する。

感じるのは王の視線と甘い吐息。

まるで覆い被さるような体勢で、私の頭上から王の声が降り注ぐ。

「俺の側にずつといるか、罪人達の慰みものになるか、下品な貴族に下げ渡されるか——お前の希望はどれた？」

「……………」

「返事はないが、答えは出ているのだろうか？」

当たり前だ。

誰が好き好んで、慰みものや圧死を望むか。消去法ですでに答えは出ている。

「だけど、こんな意地悪な聞き方をされると、素直に言いたくなくなる。」

「私もたいがい根性が曲がっているが、こんなことを聞いてくる王も相当だと思う。」

そんな私の葛藤に気付いているのだろう、王はふつと笑って言う。

「もつと素直になれ。甘えることも媚びることもしないのでは、苦勞するぞ。利用出来る権力を使わずに、いつ使う」

「……………」

「自尊心が高いのは結構なことだが、それでは生きにくいだろう」

素直になれと言うのなら、王だってその曲がった根性を直したほうがいい。いや本当に、その言葉をそっくりそのまま返してやりたい。

「で、お前は俺に言うことはないのか？」

「……」

王の問いかけに、私は首をかしげる。すると、耳に低い声が響く。

「では聞くが、先程は誰と話していた？」

ユーリスと話していたのは王も見えていたはず。だけど、その前に話していたのは……

「……ウエンデル」

ポツリと呟くと、王は何かを促すように少しだけ顎をしゃくった。

私の言葉の続きを待っているの？ ウエンデルに言われたことを、王に話せとでもいうの？

ユーリスが言ったみたいに、ウエンデルに意地悪をされて困っていると、王に泣きつけばいいの
だろうか。王はそれを待っているの？

「また、だんまりか。お前は人に甘えるということが、よほど苦手らしいな」

「……」

「不器用な奴だ」

どうすればいいかわからず考え込む私を見て、王が先に痺れを切らしたらしい。うつすらと笑って言う。

「自分の力でどうにか出来る範囲ならいいだろう。だが、この先、対処出来ないことが起きた時、お前は どうするのだ？」

「それは……」

対処出来ないこと？ そんなことがこの先あるかもしれない、ってこと？ こっちが不安になる

ようなことを言わないで欲しい。

私は小さい頃から誰かに頼るといことが苦手だった。だから極力自分の力で解決するようにしてきた。それが普通だったので、特別苦に感じたことはない。

「お前が手を伸ばせば、俺はいつでもその手を取るぞ」

「……」

思わず顔を上げて、王の赤い瞳を見つめた。決してからかっているわけでも、バカにしているわけでもない。いつもと違う王の様子に、驚きのあまり瞬きを繰り返してしまう。

「だが、お前はそれを求めないのだな」

だって、自分でどうにかすることが当たり前だったのだ。たとえ私が助けて欲しいと言っても、誰も取り合ってくれないのだろうと諦めていた。両親の仲が悪かったことが大きく影響しているのだと思う。

だから、自分の気持ちを言葉にするのも甘えるのも下手くそだった。兄弟もいなかったから、よけいにうまく出来なかったのだ。

要するに王は、私が素直じゃない性格だから、甘えてみると言いたいのか。

ユーリスにも先程、同じようなことを言われた。自分の性格を二人の人間に見抜かれていたことに、驚いてしまう。

いつもならここで皮肉の一つでも返す私なのだが、今日に限って言葉が出てこない。それは、本当のことを言い当てられたからだと思う。

心の中でグルグル考えている私に、王は静かな視線を向けていた。

翌日、部屋にいた私に、イルミさんが声をかけてきた。

「アオイ様、来週は夜会ですね」

「あ……はい」

張り切った声を出すイルミさんとは対照的に、つい気のない声を出してしまった。

来週は月に一度の、後宮の女性や貴族達が集まって行われる夜会がある。後宮の女性は必ず出席しなくてはならない。王も出席するからだ。この夜会はある意味、女性達の勝負所だと言われている。

もちろん、後宮に住む私も出席しなければならない。

「今回はどのドレスにしましょうか？」

「……別に、先月着たのと同じでもいいかな」

「えっ！ 先月と同じですか!？」

驚いた声を出すイルミさんに、私はこくんとうなずいた。

先月着たのは黒いドレス。

派手な装飾品もなく、過剰な肌の露出もない、いたってシンプルなドレスだ。ドレスというよりワンピースに近い。他の女性から見れば物足りないかもしれないが、私は気に入っている。動きやすいし、汚れが目立たないからだ。なんて実用的な理由。

「駄目ですよ！ 先月と同じなんて！」

イルミさんは声を張り上げて言うが、私は別に構わない。誰も私の服なんて注目しじゃないだろう。人のことより自分のことに必死人達だもの。

どうしても先月と同じ服装がダメだと言うのなら、身に付けるアクセサリーを変えればいい。

あとは髪型を変えれば印象が変わるので、誰も同じドレスとは気付くまい。

元々、着飾ることに無頓着な私は、後宮にいる女性達より持っているドレスが少ない。ここ数日、夜会のドレスのために仕立て屋が後宮に入り浸^{ひた}っていて、皆が我先にと購入しているらしいが、私はそれを遠巻きに見ただけだった。

ウエンデルなんて一度に十着も買っていた。……変なとこばかり見ているな、私。

そんな私にヤキモキするのが、イルミさんだ。このドレスがいいとか、あのアクセサリーが似合うとか、いろいろ薦めてくれる。

だから、今まではほとんどイルミさんを選んでもらっていた。

だいたい一晩の夜会のために、皆金を使いすぎだつて。着飾る前に、もつと磨^{みが}くところがあるんじゃないの？ つて思う。特に内面。

とりあえず今は、新しくドレスを作るようせっついてくるイルミさんに、違う話題を振って誤魔^{ごま}化^まそう。

「イルミさん、ドレスのことは後で考えます。これから図書室に行きましょう」

イルミさんはちょっと不満そうな顔をしたけれど、渋々納得してくれた。

部屋から出て廊下を歩き、図書室へたどり着いた。そこでお目当ての本を選ぶと、帰りは近道である庭園を横切る。今日は、いつもすれ違う女性達の姿がない。それもそのはず、今は仕立て屋の他に、装飾品を扱う商人も来ているらしい。だからそちらに人が集中しているのだろう。

私は人気のない後宮の庭園を歩きながら、ついニコニコしてしまった。

なぜならウエンドルを筆頭に、私に嫌がらせをしてくる女性に出会う確率が減るからだ。余計な面倒は避けたいと常日頃思っているのも、嬉しい。

うん、これなら夜会が頻繁にあってもいいかもしれない。

廊下を歩いていると、遠くの方から歩いてくる人影が見えた。あの姿は――

私が立ち止まると同時に、相手も気付いたようだ。足を止め、私に視線を投げてくる。それに気付いたイルミさんもすかさず一歩下がり、頭を下げた。

「何をしていた？」

低い声を響かせ、近づいてくるのは王だ。側にイマールさんも付き従っている。

「図書室の帰りです」

そう告げた私に、王は少しだけ怪訝な表情を見せた。

「今日は仕立て屋と宝石商が出入りしていると聞いたが」

皆が夜会の準備で忙しいなか、呑気に図書室に行っている私を不思議に思ったのだろう。だが、私には関係ない。

「そうみたいです」

「お前は装飾品を選び終えたのか？」

そう問われ、静かに首を振る。

「いえ、私は前に身に着けた装飾品がありますから」

「……ドレスは」

「それも前に着たドレスがあります。気に入っているんで、それでいいと思っています」

装飾品やドレスを選ぶことに時間を費やすのなら、私はその時間を他のことに使いたいと思っている。本を読んだり散歩をしたりしていたら、意外と忙しいのだ。

それに、誰にも会わないガラガラの後宮なんて珍しいし、今なら気分よく歩ける。

こうやってたまに王とぼったり会っても、それを見た女性達に後で嫌がらせをされることもない。そう思うと、いつもよりリラックスして王と会話ができる。人目を気にする必要がないって、なんて素晴らしいのだろうか。

邪魔をする女性達がない間に、さっさと庭園散策しよう。

「では、私は今から、イルミさんと庭園に行きますので」

いつもよりにこやかな顔で一礼し、王の前から去ろうと一歩足を踏み出した。

その瞬間、王がイマールさんに視線を投げた。

するとイマールさんは、私が抱えていた本をそっと取る。

「アオイ様。重いでしょうから、これは私とイルミがお部屋までお運びします」

「え、でも……」

「せっかくなので、王とお二人で庭園を回られるのはいかがでしょうか」
えっ!?

優しい微笑みを絶やさないとイマールさん。だけど、この状況だと、何か裏があるのかと勘ぐってしまおう。

「で、ですが、王もお忙しいでしょう」

イマールさんめ、私は今からイルミさんと庭園に行くのだと言ったばかりだろう。ちゃんと聞かえていたのか?

「いえ、王は執務の合間にアオイ様のお顔を見に行こうとなさっていたところですので、ちょうど良かったです」

「――イマール」

王が目を細め、軽口を言うイマールさんを諫めた。イマールさんは王が怖くはないのだろうか。王に向かって冗談を言うなんて、聞いているこっちの方が冷や冷やしてしまおう。

「時間が無い。行くぞ」

そう言っつて、王は私に背を向けて歩き出す。戸惑う私の背中を、イルミさんがそつと押した。

「さあ、アオイ様。行つてらっしゃいませ」

イルミさんまで笑顔になつて、一体私に何を期待しているのだろうか。だが、何となく断れない気がする。

笑顔のイマールさんとイルミさんに見送られ、私は仕方なく前を歩く王の背中を追いかけた。

小走りで歩くも、いつこうに王との距離が縮まらない。そして王は振り返らない。

ちつとも私を気にしないので、本当は私と一緒に歩く気なんてないんじゃないだろうか。

追いかけるのを諦めて、私は歩調を自分のペースに戻す。

すると、王が立ち止まり、ゆつくりとこちらを振り返つた。

「ああ、お前は小動物がゆえ、歩く速さも違うのだったな」

私を見て一人で納得して笑う王。小動物扱いされるのも慣れてきたけれど、言われっぱなしじゃ、こっちの気が収まらない。

「ゆつくり歩いて景色を楽しむことが散歩です。それに何度も言っていますが、私が小さいのでなく、この世界の人達が大きいのです」

王は赤い瞳を細めながら手を口元に持つてくると、クツと笑う。

それから王は、何も言わずに歩き出した。ただし歩調は緩めているようで、いつの間にか私の隣に並んでいる。

私は、頭二つ分近く高い王の顔をこっそり見上げた。

すつと通つた鼻筋に薄い唇、端正な顔立ち。前だけを見ている王の、赤く輝く瞳。誰もが見惚れる美貌の王は、時折すごく優しい表情を私に向ける。

それは二人つきりの時によく見せる顔だ。そんな時、王は何を考えているのだろうかといつも不思議になる。いつかその理由を聞いてもいいのだろうか。そうしたら、答えてくれるのだろうか。

私達はそのまま特に会話をすることもなく、庭園の奥へ進んだ。

一定の距離を保ち、つかず離れずの距離で、目的もなく庭園の中を歩く。足の長さの違いもあってか、どうしても私の方が遅れ気味になってしまう。焦って早足になると、前方にいる王が歩くペースを合わせてきた。

特に会話がないこの時間。いったい王は何を思うのだろう。やがて木々の立ち並ぶ場所へとたどり着いた私は、足を止めた。

「あっ……」

視線の先にあつたのは、フロースの花々。今が満開のそれを見て、私はつい顔が綻はらんでしまった。フロースは白、もしくは薄い桃色の花弁を持つ花で、甘い香りがする。私のお気に入りの花だった。こんな広い庭園でも、咲いているのはこの一角のみ。

毎日散歩をしながら、満開になるのを今か今かと待ちわびていた。

部屋に飾って香りを楽しみ、枯れる前にポプリにするのもいい。押し花のしおりを作ってみるのもいいかもしれない。

「好きか？」

「え？」

私が足を止めたままずっと動かないことに気付いた王は、顎あごでフロースを示す。花のことを聞かれているとわかり、私はうなずいた。

「フロースの花は、とてもいい香りがするので」

「好きだけ摘めばいい」

そう言われたけれど、私は迷った挙句、答えた。

「摘みすぎたらなくなってしまう。この庭では、ここにしか咲いていないのですから、もったいないです」

ただ、少しだけでも部屋で楽しみたいので、改めて摘みに来るとだけ王に告げる。すると、王がまた歩き出したので、私もその背に続く。

そしてしばらく庭を歩いた後、特に会話もなく、私の部屋の前で王と別れたのだった。いったい、何の時間だったんだろう……

翌日、私は朝から図書室に行くことにした。

昨日借りてきた本は、昨夜のうちに読んでしまったのだ。返却する本を手に持ち、イルミさんと一緒に図書室に向かう。

私が借りたい物語の本は、図書室の本棚の一番上の段にあつた。もちろん、手を伸ばしても小柄な私には取れない高さだ。それをいつも代わりにイルミさんが取ってくれる。この世界は男女ともに、日本人よりも平均身長が十センチ以上も高いのだ。

今、彼女は私がいるのとは逆の裏側の棚に回り、昨日借りた本をしまってくれている。これ以上手を煩わづわせるのも申し訳ないと思いい、何か台がないかと、私はキョロキョロと周囲を見回した。

あ、あつた。

ほどなくして、私はお目当てのものを見つけた。木の脚立きよたつだ。これに上がれば、小柄な私でも一

人で本を取ることが出来る。

身長が高いこの世界の人達は、元々脚立きゃうちなど必要ない。だけどここ数日の間で、なぜか図書室に脚立が置かれるようになった。優しい誰かの配慮だろう。

私は脚立に足をかけた。そろそろと慎重に上り、ゆっくりと一番上に立つ。

うん、すごく背が高くなった気がして、気分がいい。いつも皆は、私をこんな気分で見下ろしているのだと思うと、ちょっと悔しい気もするが、まあいいや。

私は柵に向かって手を伸ばすと、取りたい本へと指をかけた。

その瞬間、急に浮遊感を感じて息を呑む。脚立がぐらついているのだ。倒れまいと、咄嗟とつさに柵を掴んだが、もう遅い。バランスを崩した私は、そのまま落下してしまった。しかも、私が掴んだことで柵がぐらつき、床に落ちた私めがけて勢いよく本が落ちてくる。

「アオイ様!!」

私を呼ぶイルミさんの声を聞いた瞬間、頭に強い衝撃を受けた。ゴンツという音も聞こえた気がする。

星が見えた。意識を失いそうになったが、何とか堪える。

「~~~~痛つつつ!!」

私は頭を押さえて床で呻うめいた。

騒ぎを聞きつけて集まってきた兵士の手によって、私はすぐさま自分の部屋まで運ばれた。

ソファに横になり、本がぶつかった頭を氷水で冷やす。落下の際に足首を捻ひねってしまったらしく、

足を動かすとズキリと鈍い痛みが走った。少し腫はれてはいるが、明日になればマシになっているだろう。心配だからと念のために巻かれた包帯が、自分でも痛々しいと感じる。

「ごめんなさい、イルミさん。心配かけてしまって」

「いいえ! 謝るのは私の方です。申し訳ありません。本といえども重さは結構あります。角が当たればなおさらです。痛かったですよ」

手をぎゅつと握り、涙を堪えるような表情で深々と頭を下げるイルミさん。だけど、彼女が謝る必要はどこにもない。自分の落ち度だ。

イルミさんに申し訳なくて、私はふうつと息を吐き出した後、ポツリと呟つぶやいた。

「脚立なんて使わないで、最初からイルミさんにお願ひすれば良かった」

「脚立……?」

不思議そうな眼差しを向けるイルミさんに、私は説明する。

「木の脚立が置いてあったので、ちょうどいいと思って使ってみました」

「木の脚立……」

腑ふに落ちないといった表情のイルミさんに首をかしげていると、扉が開く音が部屋に響いた。そして荒々しい足音が近づいてくる。

私はいきなり現れた人物を見て、瞬時に恐怖を感じた。

「——お前は何をしている」

目の前には、不機嫌に顔を歪めて私を見下ろす王の姿があった。——怒られる!!

私と対面するなり、ソファに横になる私の全身を見回した。やがてその視線は私の足首でピタリと止まり、そのまま動かない。

私は何か言わなければ気まずいと思いつつ、王を見つめる。すると、王は目を細めて舌打ちをした。

「何があったかは、これからイルミリアに聞く。お前はしばらく部屋から出ることを禁止する」

「え……？」

「部屋で大人しくしている」

ちよつと待って欲しい。別に私はどこも悪くないのに、部屋に閉じ込められるなんて、納得がいかない。ただでさえ自由のない生活を送っているというのに、これ以上縛られては、息も出来ないほど苦しくなるではないか。

「なぜですか!？」

思わず私は食ってかかる。すると王は、不機嫌さを一層強く顔に表し、私を横目で見る。

「怪我が治るまでの間、大人しくしていると行って素直に聞く奴ならここまでしない。だが、お前は大人しくするどころか、無駄に動き回るだろう」

「そんなこと……!」

「チヨロチヨロと動くのは小動物ならはだからな」

「っ……!!」

王は私の意見など、聞く耳を持たない。それどころか、呆れたように鼻で笑う。

ここ最近、王は私を『マリ』と呼ぶことが多くなった。『小動物』と呼ぶ時は、だいたいからかっている時か、機嫌の悪い時。今回は確実に後者だ。だけど、別に私は王を怒らせるようなことはしていないので、こんな理不尽を受け入れたくない。

「でも、どこも怪我などしていないのに……!」

「二度言わせるな」

王の表情があまりにも厳しくて、口を噤つぶんでしまう。反論したいと思っていた言葉が半分も出でない。私は唇を噛み、険しい表情になる。

「どこも怪我をしていないだと……?」

王が意地悪く、口の端を上げて私に問う。私は顔が引き攣ひきつるも、うなずいた。

「っ!」

すると、王がいきなり私の包帯が巻かれた右足首を、掴んできたのだ。そこに痛みが走り、私は顔をしかめた。

「これでも怪我などないと、お前は言うのか?」

「……!」

王が、私の右足首に軽く力をこめた。今の私にとっては、それだけですごく痛い。顔をしかめる私を見て、王はひねくれた笑みを浮かべる。

私が痛がっているのは見てわかるだろう。だが、王は手を離そうとはしない。

きっと、私の口から言わせたいのだ。怪我をしていると認めさせたいのだ。

なんて根っからのサディストなんだ！

こちらから折れたくないと、変なところでスイッチが入った私は、無理矢理笑顔を作る。それを見た王は、私の足首を掴む力を緩めた。

「……どうやら怪我などしていないらしいな」
「ええ」

私は笑みを浮かべたまま、少し首をかしげた。部屋に閉じ籠もるなんて冗談じゃない。

王は無言で何かを考えている様子を見せた後、私の掴んでいた足首を、そっとソファへ下ろした——素振りを見せたと思いきや、先程よりも力を込めて、ギュッと握ってきた。

「痛っ！」

思わず眉間に皺を寄せて、声をあげてしまった。それを聞いた王は、低い声で嘲笑う。

「ああ、怪我はしていなかったようだが、どうやら俺が強く掴みすぎて、痛めてしまったらしいな」

この……！ 絶対わざとやったでしょう！?

「では、大人しく部屋で養生しろ」

勝ったと言わんばかりに、意地悪い口調をする王が憎たらしい。言い返すことの出来ない自分にも腹が立つて、唇を噛みしめる。

そんな私の様子を気にもせず、王はイルミさんに視線を向けた。

「お前には、しばらくの間、別件の任務を命ずる。まずはイマールのところへ行け」

イルミさんは、無言で頭を下げた。

「なぜイルミさんに、そんなことをさせるの……!?!」

イルミさんと離れ離れになる……。それだけは嫌だと、思わず叫んでいた。王の言う別件とはなに？ まさか、イルミさんが厳しい罰を与えられるとかじゃないでしょうね!?

興奮した私を、王は横目で見ると

「イルミリアは何のためにお前についている。お前から目を離すということは、職務怠慢だということだ」

「それは違う！ 私が……私が勝手に動き回ったの……!!」

叫んだ瞬間、私の後頭部がズキズキと、激しく痛み出す。

「お願いだから、そんなことはしないで……!」

イルミさんは、この世界で初めて出来た私の友人で、姉のような人だ。そんな彼女が私のせいで罰せられることだけは、絶対に避けたい。ううん、避けなければいけない。

懇願する私に、王はまるで面倒だとも言いたげな視線を投げた。

「キーキーと金切り声をあげて、元気なことだ。無事だったからこそ出せる声だというのに、なぜそのことに気付かない」

私はグッと言葉に詰まる。王はなおも続けた。

「これから先も、お前の軽率な行動で迷惑を被る人間がいるのだということを、覚えておけ」
それだけを言い捨てた王は、もう用事は済んだとばかりに、私に背を向けた。

イルミさんが私を見て言う。

「アオイ様は怪我を早く治すことだけを、お考え下さい」

「でも……!!」

「大丈夫です。きっと王にも、何かお考えがあるのだと思います」

イルミさんは頭を下げて、「扉へと歩を進める王の背中に続いた。

二人が部屋から出ていくのを、私は手を握りしめて見送った。

やがて扉の閉じる音が部屋に響き渡る。

「王の……バカ野郎……!!」

絞り出すような声は誰の耳にも拾われることなく、部屋に静かに響いた。

第二章 激昂

それから王の言葉通り、部屋に閉じ籠もる日々が続いた。

初日は多少足が痛かったけれど、それも翌日にはすっかりなくなつた。本当に軽い打撲だったのだ。なのに王は大袈裟すぎる。

頭のコブは腫れも引いたし、私はすこぶる元気だ。だから退屈しようがない。イルミさんも側にいないので、話し相手もないのだ。

彼女は今、何をしているのだろうか。

一度部屋から脱走しようかと思ひ、扉をそっと開けてみたが、扉の横には兵士が立っていた。……王は私相手に、なぜここまでするのだろうか。

確かに危ない目に遭つたのは事実だ。だけど、それは自分の不注意によるもので、こういった事故はよくあること。それをあんなに不機嫌になつた挙句、イルミさんを連れて行くなんて、何か理由があるの？——もしや何かを隠している？

そんな疑問が頭に浮かぶけれど、もちろん答えは出てこない。

一日に二度、本が届けられるものの、短時間で読み終わるので、すぐに暇になつてしまう。自分の足で図書室へ行って、自分で本を選びたいのだ。外に出たいし、庭園を歩きたい。王に対する不

満ばかりがたまっていく。

「軟禁生活も本日で五日目。私のストレスは最高潮だ。」

また今日もつまらない一日が始まるかと思うと、うんざりする。

そんなことを考えながら、鏡台に座って髪をとかしていたら、部屋の扉が叩かれた。

いつもの本の差し入れの時間より、若干早い。誰だろうと不思議に思いつつ、扉に向かった。

「よっ！ 元気か？」

扉を開いた向こうにいたのは、笑顔を見せるユーリスだった。

「お前、何だか楽しいことになってるな！」

彼はそう言って、すぐ嬉しそうに笑う。きつと暇だから城に遊びに来ていたのだろう。話し相手に飢えている今は、ユーリスが来てくれて嬉しい。

部屋の外で見張りで立つ兵士を見れば、いささか微妙な表情をしている。だが、彼ではユーリスを止めることは出来ないだろう。王族だし。

「中へどうぞ」

私はユーリスを部屋へと招き入れた。部屋に入ると開口一番にユーリスが言った。

「お前が部屋から閉じ込められているって耳にしてな。退屈だろうから会いに来てやったぞ！ 今度は何をやらかしたんだ？」

このユーリスの顔……絶対面白がってるでしょ、他人事だひとごとと思って！

「出禁できんだったら俺に任せろって言えただけだな。幼い頃から、それこそ何度もくらって来たし」

威張るユーリスだけど、そこは胸を張るところじゃない。全然違う。

「王の機嫌を損ねたらしくて、軽く軟禁状態です」

「アルか？ あいつも毎回よくやるよな」

ユーリスは呑気のんきな声を出して笑うけれど、私は笑えない。

「それにイルミさんも連れて行かれて……毎日が退屈だし、自然にひとり言は多くなるし、もう最悪あくです」

もう反省したから、軟禁を解いてイルミさんを戻して欲しい。

「じゃあ、マリ。俺と抜け出すか？」

「は？」

突拍子もないユーリスの申し出に、口をポカんと開けてしまった。

「俺は、城を抜け出すのも得意なんだよ」

「はあ……」

得意げに宣言するユーリスを見て、脱力した声が出てしまう。それに朝の早い時間から私に奇襲をかける彼を見て、つくづく思う。この人は暇だと――

「なんだ、そのやる気のない態度」

「……」

やる気なんて、ないに決まっている。

「えっと、どこに行かれるつもりですか？」

抜け出してもせいぜい庭園に行くぐらいでしょう。

「街だよ、街！」

「えっ……?」

予想外の言葉に大きく反応をした私に、ユーリスがここぞとばかりに言い募る。

「今日ここに来る途中、街に出店が出ていて賑わっていた。従者に聞くと、今日は月に一度の青空市の日らしいぞ」

「でも、私はここを出るなって言われて……それに外には兵士が……」

「あり、大丈夫、大丈夫。兵士はどうにでも出来る。それに、すぐ近くの街だし、そう時間もかからないから。その間、俺と庭園を散歩していることにしてもバレない」

本当にそんなことをしてもいいのかな……。そう思いつつ、好奇心が止まらない。しかし、心のどこかでブレーキをかける自分もいる。そんな自分勝手なことをしてもいいのかと。だけど……

「今夜は夜会があるから、今は城中が慌ただしい。抜け出すなら今だぞ。どうする?」

「——すぐ用意します」

もうユーリスの提案にのってしまえ!!

この後宮の女性は、許可さえもらえれば街に出ることも出来る。しかし、私だけは外出許可をもらえないのだ。それも王直々のお達しとやらで。今は、外へ出るめつたにないチャンスだ。

普段の私なら、こんな馬鹿なこととはしない。だけど今は、私からイルミさんを離れた挙句、部屋に閉じ込めた王が悪いのだという反発心がある。今回は言うことなど聞かないことに決めた。

私は部屋のクローゼットを開ける。街に行くなら綺麗な格好だと無駄に目立つだろうと思い、下働き時代の服を引っ張り出す。そして適当に大きな袋を探し、服を中に入れた。

用意している最中、徐々に楽しくなってきた。ユーリスという心強い味方（今回限り）がいるから、気も大きくなる。

「たまにお忍びで街に繰り出すんだが、なかなか楽しいぞ」

「そうなんです」

ユーリスの言葉に、心が躍る。

この目で見て、肌で感じることで、この世界がどういう場所なのか知るチャンスなのだ。

「今夜は夜会がありますので、夕方までには帰ってきましょう」

珍しく張り切る私を見て、ユーリスは笑顔を見せる。今から私達は共犯者だ。

二人で部屋の外に出ると、すかさず見張りの兵士が声をかけてくる。

「アオイ様は、お部屋にお戻りください」

「少しぐらい、いいだろう。庭を散歩するだけだ」

ユーリスが強気な態度で言い張った。

「ですが、王の許可が必要になります」

「あのなあ、その許可をもらおうと思ったら、何時になるかわからないだろう」

可哀想に、兵士は二人の王族の板挟みになっている。胃がキリキリと痛むことだろう。申し訳ない気持ちになるけれど、今回は……ごめんなさい！